かめたのである。

しかしながら、レポーターなどというものはそれほど楽しい仕事ではないなあ。とつくづく感じたとのことであった。次に、第四班鵜沼地区の坂井グループは正法寺まで、市役所の車で送ってもらって目的の寺に到着。ここは前もって電話でお願いしてあったこともあって、奥裡様（寺の奥さま）のお出迎えを受け、茶菓の接待などの歓待で大変感激はしたけれど、古墓地に参拝しただけで肝心の民話や伝説の取材は何もできなかった。仕方なく桜井さんの知人で酒屋の長老宅を尋ねることにして、三十分以上もてくてく歩いてやっとの思いでたどり着いた。そこで長老に会い、昔ばなしや伝説やら、あれこれとみんなで話の糸口を引出し、やっとのことで、大水に流されたお地頭さんの伝説的な話を一つだけ取材することができて、まあまずまず一話でも獲得できたということで、一応の責任を果たした気持ちで帰路についた時は、すでに五時を過ぎていたとの苦労話であった。

今度は蘇原地区探訪の永田班は自家用車で目的の尼寺である無染寺に向う。土地に詳しい永田さんのリードでなんなくその寺には着いたが、玄関より恐る恐る声をかけてみたが返事はなく留守らしい。さて、どうしたものかと一同ただずんでいると、裏口の方から今帰って来たらしい。まだ割合若々しい尼さんが我々のそばに来て、愛想よくニコニコしながら迎えてくれた。さっそく我々が民話取材のことを告げると、何はともあれ、おあがり下さいとのこと、佛間に通されお話が聞けることになったので、ここは柳原さんに責任をもってもらって、残りの者はちょっと離れた野口町の河野行念寺に向ったのである。この寺では永田、木村両氏の奮闘で当時の住職より寺の歴史は詳し

く説明をお聞きしたが、民話として取り上げるものはなく、お昼になったので厚く礼を述べて寺を辞すことにした。それから永田さんにすすめられるままに永田家に上り込みお昼食を頂戴することになった。これは寺を廻り佛前に額突いたお蔭でもあろうか大変御馳走になり、全く感謝感激。奥様には心からお礼を申し上げ、なお取材続行。今度は永田さん知人の白木さん宅を訪問したがここは留守でもう一軒の上村重夫様宅に行く。このお宅では近くの山に薪切りに行っているとのことでその山まで行くことになり、仕事中の上村さんにお会いできたけれども、突然のことで思うような話も引出せず、ただ時間がたつばかりで余り遅くなってはと帰えることにした。以上で取材探訪などと一口に言うものの一通りの苦労ではなかったと一同は悟った次第である。これで民話探訪記終る。

その二

初秋のある日、早朝のお宮さんの清掃のあと、ふとこの頃声が出なくなって困る、とお詣りの友達に話した。彼女は「雄飛ケ丘の北にあるお稲荷さまはのどの悪い人がお詣りしてお願いすると御利益が頂けるそうだ。私はこれからそこへ行く。」と。この頃私はいつも心にかかっている伝説とか民話の資料がそこにあるような気がして彼女について行くことにした。

それが始めて私はこの雄飛ケ丘から大島へ行く街道の右側のお稲荷さまについていろいろ尋ねて

見たくなった。大島の遠藤まさよさんから耳よりなことをきいた。

「うちの本家のおぢいさんがお稲荷さまのお守りをして見えたが去年なくなられた。おばあさんが元気だから聞いて知ってみえるだろうで、じかにきいてみて下さい。」と御親切に本家の御当主の御名前やら電話番号をきかせて下さった。

その遠藤喜美さんはまだお若くてお忙しい、すゑおばあさまに電話でお邪魔する。

「うちのおぢいさん（すゑさんの御主人）は土地改良のためにいろいろ骨折った人であのあたりのことはよく知ってみえたが去年なくなった。今でもお稲荷さまのお守りはしているけれど、詳しいことは那加の駅前のうなぎやさんが知っていられるだろう。」と

日を経てうなぎやさんをさがして訪れた。「今、用事で出かける所」と御都合が悪い。二度三度何かと用をつくってお訪ねすると「なんでそうもきゝたがりんさる。」といゝながらもポツポツと……

御主人の小島甚五郎さんはお稲荷さんのある芦原の最後の人で、すでになき人の数に入られ高齢者大学にもいっていたが細かいことはきいていない。けれど主人の友達の前洞の津田忠一さんならとか吉新町の元善光寺さんの隣の大塚さんならと頼みの綱が先へ先へとのびて行く。その間にも吾妻町の横山耳鼻科の先生にもつてを求めてお尋ねすれば「家の先々代の妹さんが嫁がれた先のことでよくわからない。」と申されたと……

そして十二月七日、民話、伝説、取材探訪の日、前洞の津田さんに電話したら畑へ出ているで帰宅の時間はわからないとの御返事、津田さんは先日電話した時には「二百年もの前の話だでよう考

えておく。」と申されたのだけど何となく御迷惑なように感じられて遠慮することにした。

そして九日前洞の不動寺へ中山さん、今尾さん、中村さんと平光の四人連れで、七日に桐野の観音寺へまわったメンバーでお訪ねした。このお寺は二ケ月ほど前にお住職さんの奥さんに「扇不動の由来と縁起書をお願いして十一月末原稿を頂いたお礼を申し上げた時、芦原の御稲荷さまのことも御存知とおっしゃったのでそのうち又お伺いすることを約束してあった。折もよく学校から割り当てられた場所と一致した。三時の約束の時間前に芦原のお稲荷さまへお詣りした。丁度そこに地主の遠藤さんから畑仕事を頼まれた若い衆が一服してみえた。そしてこんなことを聞くことができた。

お稲荷さまのおまつりは二月の初午の前日で、お守りをしてみえる遠藤さん方でお餅まきをなさるのでお詣りする人も相当ある。御利益のことはあまり知らない、古いことは大島のバス停前の遠藤先生なら御存知だろうと……

祠は五十坪程の広さに桜や紅葉なぞの立木に囲まれ赤い鳥居の奥におさまっている、祠の台座には御遷座昭和四十二年遠藤喜好とある。

鳥居のかたわらには消えかかって僅かに　どの字か読みとれる程の小さい板が打ちつけられ雨風にさらされている。多分ここのお稲荷さまの御霊験のことが書かれてあったのだろう。

又の機会にお詣りすることを心にきめて約束の不動寺の時間におくれないように急ぐ。

お寺の島田奥様は気のおけない態度で見晴らしのよい別棟の玄関でお稲荷さまにまつわる話をして下さいました。以上あちこちで今日まで集めたお話をつなぎ合せて一応綴ってみました。

その三

同輩諸賢の申し合せによって、須衛方面に民話の取材にあたって、二、三人の古老をめあてに訪ねたが、第一の人はすでに他界、第二の人は留守、先ずここでガッカリしたが、思いのまま、めあて以外の人を野良に訪ねた。第三の人も予期していたとおりネタもない。時事放談となってしまった。事後においての取材方法については再考せざるをえないことを痛感した。何かほりあてて、帰らなければと白木某宅に立寄った。

昔から地元において無名の古城の跡ではないか、豪族の屋敷跡ではないのかと噂さをされている旧跡らしいところの照会を得ることができた。古くからお天主、お局屋敷と呼ばれながら鵜沼町史にも登載もなく、今日に至っているが須恵器の発祥地であり、またここ数年来、市の北部開発の主軸となった稲田山麓の木材団地の南に続く付近の丘にあって、将来は宅地の造成や、土取り場に適し、その破壊も憶測されている。豪族屋敷か古城趾かの噂による証言

1　昔からの言い伝えにお天主、お局屋敷の俗称がある

2　現在山林とその一部は農家の屋敷ではあるが、お堀の如きものがある

3　現在地から西方は連山また連山ではあるが、その山と山の間から金華山を眺むことができる

4　須衛付近の足立姓の原流ではないか

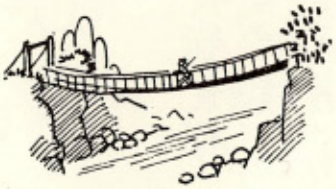
現実的、文献的証言

1　その末裔と考えられる足立某が祖先として回忌が営まれている

2　足立佐衛門源好光の肖像画が保存されている

3　足立佐太郎の基標が法善寺に現存している

以上の理由等々極めて短時間であって、現地を視ることもできないで、単なる民話として聞いてはいるが、郷土研究者かまたはその筋の関係者によって深くほり下げて、城趾か、豪族屋敷かを判明させて民話の一環とせず、民俗的また観光的史蹟ともなり、さらに往事を忍び太古の営みがうかがわれよい考古研究資料ではなかろうか。



郷土のうたあそび

表現あそび
お手玉あそび
手まりうた
縄とびあそび
縄とびのうた
子守うた
子とりあそび
数えうた
木やり

表現遊び

山寺のおしょうさん　涙をぼろ〳〵〳〵〳〵
　出した涙を袂で拭いてネ〳〵
拭いた袂を河行ってざぶ〳〵ざぶ〳〵
　洗った袂をしぼりましょう〳〵
しぼった袂をほしましょう〳〵
　ほした袂をよせましょう〳〵
よせた袂をたたみましょう〳〵
　たたんだ袂をたんすへがさ〳〵
しまった袂をねずみががさ〳〵がり〳〵
　かじった袂を布持ってついてネ〳〵

表現遊び

淀の川瀬の大水車　夕べチョッコロリと咲いた
風が大須へ聞えて　大須のお馬も一つ一つ
こして帰りましょう

表現遊び

ここはどこの細道じゃ
　天神さまの細道じゃ
一ぺん通して下さんせ
　御札のないもの通しゃせん
この子の七つのお祝いに
　御札を持って参ります
行きはよい〳〵　もどりは　こわいぞ　こわい
こわいながらも　通りゃんせ　通りゃんせ

表現遊び

姉さん　姉さんどこ行くの　私は田んぼへ稲刈りに
私も一しょに　つれしゃんせ
お前が行くと　じゃまになる
　かんからぼうず　くそぼうず

表現遊び

信州信濃の新そばよりも
私しゃ　セノお前のヤレコノサそばがよい
私の殿御は踊りで見染め
今は　セノ二人で　ヤレコノサ踊ります
お前百まで　私しゃ　九十九まで
共に　セノ　白髪の　ヤレコラサ皆生えるよ
私しゃ　はた屋の織子でござる

絹や　セノ人絹　ヤレコノサ皆織れるよ
西の山みよ　ちんばが通る
笠が　セノ見えたり　ヤレコノサかくれたよ

二人手と手を合せる遊び

一つ　ヒョドリ米の飯　テンコテンコ
二つ　舟には船頭サが　テンコテンコ
三つ　みなさんよろいで　テンコテンコ
四つ　横浜異人さんが　テンコテンコ
五つ　医者殿　薬箱　テンコテンコ
六つ　昔のはやりまげ　テンコテンコ
七つ　なきぶそ蜂がさいて　テンコテンコ
八つ　焼芋かじりついて　テンコテンコ
九つ　こじきがお碗持って　テンコテンコ
十　殿様　おかごで　テンコテンコ

ハリャリャ

われたもあればな　われんのも
あるは　茶碗屋の　えんの下
むかい通るは　清十郎でないか
笠がよく似た　清十郎笠
笠が似たとて　清十郎であろか
お伊勢詣りは　清十郎笠
織れたもあればな　おれぬのも
あるは機屋の店の先
立ったもあればな　立たぬのも
あるは五月の鯉のぼり
むけたもあればな　むけんのも
あるは奈良茶の豆の皮

輪になって中に一人すくむ

もしもし亀よ　亀さんよ
　　世界の中で　お前ほど
三辺まわって　おじぎせよ
　　後の正面　誰れ

お手玉遊び（お手玉三つか五つ使う遊び）

オジャミ　オヒトツ　オトシテ　オサラヘ
オフタツ　オトシテ　オトシテ　オサラヘ
オテシノセ〳〵オサラヘ
オハコビ〳〵オサラヘ
オチリンコ〳〵オサラヘ
オヒダーリ〳〵ダーリダリ
ヒトヨセ　ナカヨセ　オサラヘ

シモツケ　オサラヘ
デンデンブーシ　デンデンブーシ　ブーシブシ　オサラヘ
オンマニ　ノーリカヘ　ノリカヘ　チョン　オサラヘ
ガンガノ　ガリガリ　チョン　オサラヘ
コーカマクグレ　コーカマクグレ　オサラヘ
オオカマクグレ　オオカマクグレ　オサラヘ
ニホンバシ　マタゲ　ニホンバシマタゲ　オサラヘ
ゴホンバシ　マタゲ　ゴホンバシマタゲ　オサラヘ

一丁カシタ

お手玉遊び（お手玉三つ使う遊び）

一つ　がら〳〵　乗ってきて
二つ　サンショの木
三つ　みかんを食べすぎて
四つ　夜中に腹くだり
五つ　いつものお医者さん
六つ　向うの看護婦さん
七つ　泣いてもおっつかぬ
八つ　焼場へ捨てられて
九つ　ここでもおとむらい
十　父さん墓参り

手まり歌

一、いも　いも　いも
二、にんじん　にんじん　いもにんじん
三、さんしょ〳〵　いも　にんじん　さんしょ
四、しいたけ〳〵　いも　にんじん　さんしょ　しいたけ
五、ごんぼ〳〵　いも　にんじん　さんしょ　しいたけ
　ごんぼ
六、ろうじ〳〵　いも　にんじん　さんしょ　しいたけ
　ごんぼ　ろうじ
七、ななくさ〳〵　いも　にんじん　さんしょ　しいたけ
　ごんぼ　ろうじ　ななくさ
八、はまぐり〳〵　いも　にんじん　さんしょ　しいたけ
　ごんぼ　ろうじ　ななくさ　はまぐり

九、くり〳〵　いも　にんじん　さんしょ　しいたけ
　　ごんぼ　ろうじ　ななくさ　はまぐり　くり
十、じゅうばこ〳〵　いも　にんじん　さんしょ　しいた
　　け　ごんぼ　ろうじ　ななくさ　はまぐり　くり
　　じゅうばこ
　　一杯つめて一丁かした。

てまりうた

わたしのてまりは　きぬいとかがり
つけばよごれる　たばえばかびる
かわにながせば　やなぎにとまる
やなぎきったら　かわながれ　かわながれ

てまりうた

さやのなかやま　とおるとみれば
きくやぼたんや　おてんばるはなや
いけばようきた　あがれとおっしゃる
あがりことばに　かたじけないが
おくでしょうぎさす　なかのまでごをうつ
したでもちつく　にかいでまねく
おだいどころでは　こと　しゃみせん
すとんとおとして　おみさの　ささ
　　一完　渡した

手まり唄

とんとんたたくは唯さんや
新町横町の儀兵衛さん
今頃なにしにおいでたや
雪下駄が変ってかえにきた
お前のせったは何雪駄
わたしのせったは京雪駄
京の米屋の善四郎は

一人娘をもちかねて
今年十五で嫁らかす
嫁入の道具は何何ぞ
長持七つに帯八筋
縮緬足袋が八足で
巻いたきしょうが十三本
これほど持たせてやったのに
頭をすって衣着て

手まり唄

一に　俵をふんまえて
二に　にっこり笑って
三に　杯いなだいて
四つ　世の中よいように
五つ　出雲の若ゑびす
六つ　無病そくさいに
七つ　何事ないように
八つ　屋敷を広げて
九つ　お蔵をちょっと　たてて
十お　とうとうおさまった

しんしんしっかり受取りました
誠に今晩大事な姫を　お育て申せば
するめもゆうらん　赤目もゆうらん
私のむこうのほこほこづくしか
白かべづくしか　貴方さんの　お手の下まで
御渡し　申します　申します

鉄砲かついで　どうらんさげて
奥のお山へ　おきじを撃ちに
おきじうてたら　お茶屋へよって
お茶はよい茶で　のみます　五杯
姉は二十三　妹は二〇
妹ほしさに　御りょう願かけて
伊勢へ七度　桑名へ　八たび
お多賀様へと　月参り　月参り

清水の　観音様に　雀が三匹止まった
その雀が　蜂にさされて
　　いたいた　ぶんぶん
　　いたいた　ぶんぶん
先ず先ず　一完渡し　申した
西を向いても南無阿弥陀
東を向いても南無阿弥陀

手まり唄

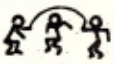
青葉しげちゃん　昨日は
色々お世話に　なりました
私こんどの日曜に東京女学校に参ります
あなたもくれぐれ　御勉強を
なされて下さい　たのみます

縄とび遊び

じゃんけん　じゃがいも　北海道
　まけたら　さっさと　お出なさい

縄とびの歌

郵便さんお早ようさん　葉書が落ちました
一枚　二枚　三枚　四枚　五枚　六枚　七枚　八枚　九枚
十枚　花が咲いた開いた
　　向い合って背中に廻す
お寺の水はどうして汲むじゃ
釣る瓶をかたげてこうして汲むじゃ



鍋　鍋　底ぬけ
　　底がぬけたら
　　かわりましょう

手まり唄

山の中のちくちくは　どこまで走った
天月様まで走った　何持って走った
お椀持って走った　天月様のお祭りは
あらけないお祭りで　すっとりからから
　すっとんとん　すっとんとん
それ　それ　一完　渡した

手まり唄

げんげんほろほろ何んで泣く
親がないか子がないか
親もあるが子もあるが
たった一人の男の子
鷹に取られて今日で七日
七日と思えば四十九日
四十九日の寺参り
叔母所へちょっと寄って
羽織と袴と貸しちょくれ
羽織も袴もよう貸さぬ
おっぱら立ちや腹立ちや
腹立ち川へ飛び込んで
下から亀がつつくやら
上から鳶がつつくやら
これでおとして一完渡した

お手玉の歌

兄さん国は西の原
いつもの学校を終えたなら

散歩に行くほど公園に
青葉兄さんこの花は
何んとおっしゃる花ですか
としちゃんこれはおみなえし
咲いている花いくつかと
数えてごらん面白や

縄とびの歌

お嬢さんおはいり
　　はいろうかね
じゃんけんぽ負けたら
　　さっさとお出なさい

手まり歌

関の仙太郎さは利口そでたわけ
たわけたわけがお夏に惚れた
お夏なぜ泣くな飯くわぬ
腹が痛いか夏やみしたか
腹も痛うのて夏やみせぬが
わしのお腹にねんねこさが出きて
出きたその子が男の子なら
学校へのぼせて学問させて
学問ぶちょうほでお馬にのりゃさんす
馬からおおちてお医者にかかり
医者かかり一者かかり
何んべんかかっても
　　なおりゃせぬ
　　なおりゃせぬ
先ず先ず　一完渡し　申した

手をつないで輪になって中に一人すくむ
中の中のこん仏なんで背が低い

親の日に魚食ってそんで背が低い
立つか立たぬか立って見よ
　後の正面だあれ

かもめかもめ　篭の中の鳥は
いついつ出やる　夜明けの晩に
鶴と亀と滑った　後の正面だあれ

耳と手の遊び

せっせのせ　今年の牡丹はよい牡丹
耳にかけて　すっぽんぽん
もう一つ掛けて　すっぽんぽん

手まり歌

かえかえてん毬　落すと恥かく
尻まくり捲くって　皆さん尻がでる
それでもあなたは　ご承知かな
それそれお渡し申す　だれかさんに

手まり歌

げんごろ何処いきやる　この寒空に
寒むても強ても　行かねばならぬ
今日は九日　左官さの嫁入り
猫が嫁入する　鼬が仲人
二十日鼠が　三升だるさげて
裏の細道　ちょろちょろと―
　ちょろちょろと―
　一完渡した

お手玉

おさらお一つお一つおさら

お二つお二つおさら
お三つお一つおさら
お四つおさら
いちりんこいちりんこおさら
おはさみおはさみおさら
お手のせお手のせおさら
おひだりおひだりさされかどん
仲よしつぼよしおさら
小さい橋くぐれ小さい橋くぐれおさら
大きい橋くぐれ大きい橋くぐれおさら
小さい山おこせ小さい山おこせおさら
大きい山おこせ大きい山おこせおさら
去年の三月今日おわった
去年の三月今日おわった

三羽の雀

わし等が裏のちしゃの木に　雀が三羽とまって
一羽の雀もたって　二羽の雀もたって
三羽の雀のいう事にゃ
ゆうべ御座った花嫁御
座敷にちゃん〳〵　すわらせて
大飯八杯　汁五杯
それで　まんだ足らんとて
干大根十三本
それで　まんだ足らんとて
裏のよの木に喰いついた

縄とび歌

お高さん午旁いくら　十三銭
お高安高　一二三
大事な大事な丼鉢を　けつからかいて
わらかいて叱られて　裏の柿の木にしばられて
朝から晩まで　水食わす隣のばあさん
とんで来てぼた餅一つ下さった

十七、八の姉さんが垣根にもたれて泣いていた。なぜ泣くのと問うたれば、私は九州鹿児島の西郷の娘と申します。父はうたれて死にました。母は病気で寝て居ます。一二三四五六七八九十

手まり歌

鳥屋の裏の千本桜　雀が三羽とまって
一羽の雀はとび立って行くし　二羽の雀は何かに　取られて
かくれた　かくれた

もずの鳴声

ゆうべ一寸でて一分二朱負けた
ゆうべ一寸でて一分二朱負けた

「台風や近所の火事の時、悪魔が通る。火鳴鳥が火を運んでくる」というので、庭に鎌をつけた長い竿を立て、家人が外へでて「ホーイ、ホーイ」と大声をあげて追った。

子守歌

花おりに　いこまいか
何花折りに
ボタン　杓薬　ボケを折りに
一本折って手にもって
二本折って　腰にさいて
三本目に　日が暮れて
鳥の宿へとまろうか
鳥の宿は居るので　いやいや
トンビの宿へ　とまろうか
トンビの宿は　しらみが居るので　いやいや
雀の宿へ　とまって
朝早よう起きて

前の川畔見れば　猿が三疋通る
前の猿は　物しらず
後の猿も　物しらず
まん中の猿は小さくて　よう物知って
川へ飛び込んで　鯰一疋おさえこんで
とうしんで　からげて　線香で　いなって
京の町へ売りに行った
京の町の子ども衆は　何たら賢い子ども衆じゃ
ばーやにおぜにをあずけて
鯛買っちょくれ　鯉買っちょくれ

子取り遊び

乳子乳子　子一人おくれ　どの子がほしや
誰々（人の名）さんがほしや
何食わせておきゃる　里豆小豆
そら大毒じゃ　赤いままにととそえて
それではよかろう　名は何とつけた
鳥とつけた　カア　カア　カア
ちんこちんこ　何んぢゃ何んぢゃ
子が一人ほしい　何んていう子がほしい
誰かさんがほしい　何食わして育てる
鮎に骨なし　鳥賊取って食わす
乗り物何んじゃ　お駕籠でお出で
お駕籠は危ない　歩いてお出で
名は何んと付ける　蒿と付ける
ピイ　ヒョロ　ヒョロ　ヒョ

数え歌

一ばん　はじめは　一の宮
二は　日光の　東照宮
三は　桜の　宗五郎
四は　信濃の　善光寺
五つ　出雲の　大社

六つ　村々　天神さん
七つ　成田の　不動様
八つ　八幡の　八幡宮
九つ　高野の　こうぼうさん
一〇　東京　大地震

にらみっこ

だるまさん　だるまさん　にらめっこしましょ
笑った者　のけて　おっぷ　ぷの　しゅう

数え歌

一つとや
人人忠義を　第一に　第一に
仰げば高き　君の恩　国の恩
二つとや
二人の親を　大切に　大切に
思えば深き　父の恩　母の愛
三つとや
幹は一つの　枝と枝　枝と枝
中よく暮せよ　兄弟　姉妹
四つとや
よきこと互いに　進み合い　進み合い
悪しきを広むな　友と友　人と人
五つとや
偽り云わぬか　子ども等の　子ども等の
学の光を　身に付けよ　身にそえよ
六つとや
昔の考え　今を知り　今を知り
学びの始めを　気に付けよ　心せよ
七つとや
難儀をする人　見る時は　見る時は
力の限り　痛われよ　哀れみよ
八つとや
病は口より　入ると云う　入ると云う

呑み物食い物　気を付けよ　心せよ
九つとや
心は必ず　高くもて　高くもて
たとえ自分は　低くとも　軽くとも
十おとや
遠き祖先の　教えをも　教えをも
守りて尽せよ　国の為　人の為

数え歌

一ワモ　わしゃ石積まねど　石屋ならこそ
シイジュ　石積みまする　わしゃ石積まねど
チャンコロリント　カマイダ
二ワモ　わしゃ庭掃かねど　女中ならこそ
シイジュ　庭掃きまする　わしゃ庭掃かねど
チャンコロリント　カンマイダ
三バモ　わしゃ三味引かねど　芸者ならこそ
シイジュ　三味引きまする　わしゃ三味引かねど
チャンコロリント　カンマイダ
四ワモ　わしゃ皺よらねど　年寄りならこそ
シイジュ　皺寄りまする　わしゃ皺よらねど
チャンコロリント　カマイダ
五ワモ　わしゃ業わかねど　喧嘩ならこそ
シイジュ　業わきまする　わしゃ業わかねど
チャンコロリント　カンマイダ
六ワモ　わしゃ牢屋入らねど　盗人ならこそ
シイジュ　牢屋入りまする　わしゃ牢屋入らねど
チャンコロリント　カンマイダ
七ワモ　わしゃ質おかねど　貧乏ならこそ
シイジュ　質おきまする　わしゃ質おかねど
チャンコロリント　カンマイダ
八ワモ　わしゃ鉢割らねど　喧嘩ならこそ
シイジュ　鉢割りまする　わしゃ鉢割らねど
チャンコロリント　カンマイダ
九ワモ　わしゃ桑食わねど　蚕ならこそ
シイジュ　桑食いまする　わしゃ桑食わねど
チャンコロリント　カンマイダ

十パモ　わしゃ銃持たねど　猟師ならこそ
シイジュ　銃持ちまする　わしゃ銃持たねど
　　チャンコロリント　カンマイダ

農民の代官所への手紙

一一申上候　二が二がしくは　候えども
三ん三んの　四第にて五穀　六六実のらず
七におくやら　八じをかくやら　九わずに
暮す十年の　苦しみ　何卒お許し　下されたく　候

お殿様の返事

十分に農作しながら　九わずに暮らす
などとは　心えちがい　八じを八じとも
思わずに　七におくやつは　六なやつではない
五公儀の掟を　持って　四罪とは
思えども　三代将軍の　お情を
持って　二度とは許さん　一度は　許して仕わす

表現遊び

源四郎男は　派手者で
　　困るわね　困るわね
金の指輪を　両手に
　　しっかりと　しっかりと
お小夜さみたような　娘が一人
　　ほしいね　ほしいね

木やり

一　迎　え　唄

さーらば　どなたも一度によいやねー
あ　えんやえんや　はりわさのえんやこのさ　やれこの　如

才はござらぬえー
如才なくとも　はやそうにけー　せんせーせー
はやしたら　よいこえかきょ　よほほーん　よーおん　よー
おほほんえー　は　よい　よい　よいやねー
さーらば大仏やけて　よいやねー
大仏さんがやけてから　小仏さんえ参るのも　如才はござら
ぬえー

二　やぐらを廻る唄

さーらば　いの字で　ばやしましょかえー
いーえん　いーえんえー　いーざい　よーおく
いーじゅーれー　いふねーえに　いーいふ　たーあの
おーおー
いーざい　よーおく　いーぐるま
いりじん　いりじん　いやよー　いや　これはのせー

三　はしごのぼり

えーん　えーん　こぼくでなーん　なん　こぼくでなーんて
んのおい　（よいよいと二つのぼる）
よいふり　よいふり　こぼくでなーん
からさきの　おそれさいたまことに　なーん　うぐいすがな
ーん　後生大事と　ほけきょうよむ　は　これわいな　は
れわいな　（よいよい　いよいよさつさと四つのぼる）
えーん　えん　たなばたなーん　なーん　たなばたなーんか
いのおい　（よいよいと二つのぼる）
よいふり　よいふり　たなばたなーん
からさきの　おそれさいた誠になーん
うぐいすがなーん　川をへだててこいをめす　あ　これわい
な　はりわいな　（よいよいと二つのぼる）

四　かんぬき

やー　かなづる　山でもかかれ　やーんそれー
はりわさのーん　えー　（どさーんと早く棒をおとす）

五　荷　受　け

さーらば　荷受けや　よいやねー
えんや　えんや　これはのえー　やーとるー　あーあー

うりこの如才は　ござらぬえー
ういー　御所のお庭で猿がたてまい　さいた　さいた　かけ
やなんぞで　はやしかきょ　よいこ　えかきょ　よほほー
い　よーん　よほほいえ　よいよい　よいやねー
ういー　はる年なれば　みな浮かれきて　誰も野山にそりゃ
あそびする　ふっと見合わす顔と顔
ういー　夏の涼みは両国橋よ　出舟入舟そりゃ屋形舟　あが
るりゅうせんではやしかく

六　つなさばき

ひーん　よーい　そりゃ
関東兵衛が　大須へ参り　さすり仏をみて　とっさん　あり
ゃ何んだ　坊さんがうごいたのかと問う
たかやーとー
さーあ　あーあ　ひきづなー　やーえーやーそれ
はりわいさのんえー
西風にあられ降る　チャボ米と見て　とんでたかやーとー
こうやのもがれにチャボとまり　こか　こーやかとないたか
やーとー
しめてはたぐり　しめてはたーぐる　えーえーうふふい
さー　ひきづなー

七　さ　く　り（道唄）

よほほーん　つーくさーなー　さのさが水所で
義はざんざー　よいやねー
今日は北野の御命日　よいやねー
参る同者は多けれど　よいやねー
参る同者のその中で　よいやねー
十七・八の小娘が　よいやねー
右のたもとで数珠をくり　よいやねー
左のたもとで礼をふり　よいやねー
何んのためやと問うたれば　よいやねー
十五で別れたとのため　よいやねー
はー　よいよい　よいやねー　ようい　うたさーいが
えんやらやーはりわいさのさのえー
さて西行の坊さんが　よいやねー
初めて旅路をなさるとき　よいやねー
宮の熱田に休まれて　よいやねー

沖の方を打ちながめ　よいやねー
こんな涼しきこの宮を　よいやねー
誰が熱田と名をつけた　よいやねー
さて西行の坊さんが　よいやねー
水なき瀬川を渡るとき　よいやねー
こんにゃく背骨で足をつき　よいやねー
とうふの角で腰をうち　よいやねー
くすりはないかとたづねたら　よいやねー
あるともあるともござんする　よいやねー
山の頂上のはまぐりと　よいやねー
海のどん底の松茸と　よいやねー
水でこがして　火で練って　よいやねー
あしたつけたら今日なおる　よいやねー

八　手　休　め

おいかけ　まづは当座のお手休み　よいやねー（ゆっくりと）
まづはまづ正月の初夢に　めでたきことを夢にみて
よいやねー
西国たたらの新とろかとろりやとろりと拍子そろえて声かきょう　よいやねー
きさらぎ山の楠木で　舟をつくって今おろす　よいやねー
たつがしらのへさきには　金と銀とのろがいをつけ
よいやねー
からかねの帆柱に　こがねのせみをふくませて　よいやねー
おづなほづなは琴の糸　あやや錦の帆をあげて　よいやねー
その船にのりたる神々は　一に大黒　二にえびす
よいやねー
ほてい　ほくろく　弁財天　びしゃ門さんや寿老人
よいやねー
よろづの宝がこの上に納まる
追いかけなかのつなみごと　よくそろたえ　えんやらよい

九　石　割　り

これからは　これからは　石割りやが合点か
合点なればたのむぞえ
下棚の同行楽へ頼むぞえ　何じゃえな
中棚の若い衆へたのむぞえ　何じゃえな
上棚の強力衆へたのむぞえ　何じゃえな

十七・八の小娘で　蛇の目の傘がよく咲いた
ひんやさのーん　えー
（大きな石づきの棒を高く高くあげてどすーんとおとして
石を割る）

十　終りの唄

春立つや　しょうぎのこばしいさみいで
花のおほほい　あ　花の笑顔も千金の
あ　いんやほい　さしょーい　そいよほい
ありゃりゃ　よいとなー
胸をさすりて　はちすわり　一人まるねの床のうち
これにとめおく　やーと　やーと　やー
はやしたら　よいとこねー
大名の宿入りには　槍のないのも　よいとこなあー
やーと　やーとやー

出迎えのうた

向うを通るは　清十郎じゃないか
傘がよくにた清十郎笠に
笠がにたとて　清十郎であろか
お伊勢参りは　みな笠じゃもの

一ッつきの唄　伊勢音頭

お伊勢ネー参いったら　ヨンヨイ
浅間を掛けなヤーヨイセ　ソコセー
浅間ナー掛けなきゃソレワ片参り
コリャ〈　ヤットコセーエ
ヨーイヤナ　ハリャリャ
コレハイセ　サーア　ヤレハコレハイセー
お伊勢ネ　参ったらヨンヨイ

伊勢子ができて　ヤーヨイセ　ソコセイ
お名はよう　何んとつけよー
　　ソレハ伊勢ッ小町
コリャ〳〵　ヤットコセーエ
　　ヨーイヤナ　ハリャリャ
コレハイセ　サーアコレハイセー

三ツづき　松前音頭

ヤー松前やの殿サハヤーレ〳〵
　　お国が騒動で　お江戸へお帰りヤーレ
ハーリワハ　リャリャリャ
　ソラヨイソラ　ヨイソラ　ヨイソコネー
勝手で盗み酒ヤーレ〳〵　千本桜の道行で
　静かに　忠信かよーヨホイトネ
ハーリハハー　リャリャリャ
　ソラ　ヨイソラ　ヨイソラ〳〵ネー

魔よけの歌

台風や　近所の火事の時
「悪魔が通る、火鳴鳥が火を運んでくる」というので、庭に鎌をつけた長い竿を立てて、家人が外へ出て、ホーイ、ホーイと追った。

もずの鳴き声

「ゆうべ、一寸出て、一分二朱まけた」

正月を待つ子供の歌

正月さま、どこまでござった。前の橋まで、ござった。何もってござった。下駄の歯のような餅もって、笹の葉のよう

な魚もって、ねぶりねぶりござった。

子守り歌

花折りにいこまいか。何花折りに、ボタン・芍薬・ぼけの花折りに。一本折って手に持って、二本折って腰にさいて、三本目に日が暮れて、鳥の宿へとまろうか。鳥の宿は、のみが居るので、いやいや、トンビの宿へ、とまろうか。トンビの宿は、しらみが居るでイヤイヤ、雀の宿へ、とまって、朝早よう起きて、前の川畔見れば、猿が三疋通る。前の猿は物知らず。後の猿も物知らず、まん中の猿は、小さて、ようものしって、川へ飛びこんで、鯰一疋おさえこんで、灯心で、つげて、線香でいなって、京の町へ売りに行った。京の街の子ども衆は、何たら賢い子ども衆じゃ。婆やにおぜにをあずけて、鯛買っちょくれ、鯉買っちょくれ。

三羽の雀

わし等が裏のちしゃの木に、雀が三羽とまって、一羽の雀がたってって、二羽の雀もたってって、三羽目の雀がいうことにゃ、ゆうべござった花嫁御、座敷にちゃんちゃんすわらせて、大飯八杯、汁五杯、それで、まんだ足らんとて、ほした大根十三本、それでもまんだ足らんとて、裏のヨの木に喰いついた。

成清雨乞い踊

東西静まれ　唄おろそ
東西静まれ　唄おろそ
お社宮じ様へとおどり来て
雨乞いかけたに雨おくれ
ソーライチャンチャカチャンのチャン

いざり勝五郎車にのせて
エ引けよセノ初花ヤレコノサア
オーイチンチチンチ
信州信濃の新そばよりも
エ私しゃセノお前のヤレコノサア
そばがよいよ
オーイチンチチンチ
私の殿子は踊で見染め
エ今はセノ二人でヤレコノサ　踊りますよ
オーイチンチチンチ
お前百まで私しゃ九十九まで
エ共にセノ白髪のヤレコノサ　はえるまでよ
オーイチンチチンチ
西の山見よちんばが通る
エ笠がセノ見えたりヤレコノサ　かくれたりよ
オーイチンチチンチ
今夜おいでよ十二時すぎて
エ裏のセノ切り戸をヤレコノサ　こっそりとよ
オーイチンチチンチ

娘島田と新木の船は
エ人もセノ見たがるヤレコノサ　乗りたがるよ
オーイチンチチンチ
平家名代の景清でさえ
エ阿古屋セノ恋してヤレコノサ　牢やぶるよ
オーイチンチチンチ
お園半七夫婦は名だけ
エこれもセノ三勝ヤレコノサ　あるゆえよ
オーイチンチチンチ

成清雨乞い踊

宇治のほたるでちぎりを結び
エ深雪セノ不便やヤレコノサ　目をつぶすよ
オーイチンチチンチ
幡州お菊は大事な皿を
エ割ってセノはりまにヤレコノサ　殺されるよ
オーイチンチチンチ

お染久松あの蔵の中
エわしとセノお前はヤレコノサ　深い仲よ
オーイチンチチンチ
ハリャラリャアヤットーセー
われたもあればナわれんのも
あるは茶碗屋のえんの下
むかい通るは清十郎でないか
笠がよく似た清十郎笠
笠が似たとて清十郎であろか
お伊勢まいりは清十郎笠
織れたもあれば織れぬのも
あるは機屋の店の先
立つたもあればナ立たぬのも
あるは五月の鯉のぼり
むけたもあればナむけんのも
あるは奈良茶の豆の皮
お日が暮れたら差せのとおしゃる
門のとびらのかんぬきを
娘したがる親させたがる

買うに金無い朱子の帯
娘十七髪桃割れで
顔に化粧の花が咲く
月の丸さに地球の丸さ
成清踊りの輪の丸さ
踊りすぎぢゃで今来たわいな
わしも仲間にしておくれ
戦死せられてわしゃ未亡人
今じゃこの子と二人きり

成清雨乞い踊

はだか人形となるわしの身も
みんなお前がいとしさよ
わすれまいぞえ都の桜
縁を結んだ花じゃもの
木曽の流れにろかいを添えて
ライン下りの程のよさ

月の丸さと恋路の文は
東京西京も同じこと
芝居見にいって役者にほれて
私しゃ一人で身をこがす
竹の丸太橋すべりそでこけそで
あぶないけれども
主と二人ならねっからあぶなない
心中しませうか髪切りませうか
髪はのびもの身は大事よ
　　トンコトンコ
竹の丸太橋サすべりそでこけそで
あぶないけれども
主人と二人ならねっからあぶない
トンコトンコ
夏の夕立ア上ではピカピカ下ではビシャビシャ
嚊よ蚊帳つれ線香たけ
抹粉たけへそかくせトンコトンコ
雪はふるふる小池の小川に氷がはって
さぞや船頭衆がすべってころばんしょう

トンコトンコ
物の白いのは豆腐に倉のかべ横丁の御門
まんだ白いのは雪降り今朝の霜
トンコトンコ
物の黒いのは鍋か茶釜かかじやのおやじ
まんだ黒いのは千年昔のお釈迦様
トンコトンコ
物の赤いのはおやまの稲荷の鳥居
まんだ赤いのはお猿のおけつと唐がらし
トンコトンコ
物の丸いのは十五夜お月さんに
まんだ丸いのは坊さん頭に真桑うり
トンコトンコ

一つと通いな

人に知られぬ妻持てばァ
ひいさし柱の軒に立つ

二見の浦では網を引く
網を引くより女郎を引け
美濃が焼けする北美濃が
美濃に親子を持たねども
四間の座敷にふたり寝て
思いし恋しと寝て語る
いつかこの日も日がくれて
入相鐘がなるわいな
娘が結んだ玉結び
秋風立たねばとけわせぬ
なんたる宝を振り捨てて
後生大事と願はしゃれ
ややより姫子が今宵来て
お角や御門に巣をかけた
ここであはねば極楽の
極楽浄土の門外で
十勝寺の鐘がなる今なる鐘は除夜の鐘
踊りはまだまだながけれど
我等の踊りはこれまでぞ

伝承技術

今とむかしの節分の行事について

絵絹の生産

自家製　麺としるこぼち

製　　瓦

民族的風習について

今とむかしの節分の行事

今年も節分が近づいたので、じいさまは今日も朝から藁を打って草鞋を作りにかかりました。ちょっと大きい目の草鞋じゃったと。いよいよ節分が来たので、ばあさまは豆を炒る。じいさまは草鞋に炭と大根と籾殻を入れて、屋敷を若い者二人に引かせて「何を突く。」じいさまは後から藁打槌で地面を叩いて「鬼を突くわいの。」と云って廻って最後に垣根に縛っておいたそうじゃ。

それから柿が去年はならなかったので柿の木の側で若い者二人が斧と鉈を持って「なるか。」「ならぬか。」ならな打ち切ると叫びます。垣根の外からじいさまは首を出して、さも嘆願するように与一小一生きると云うにおいて下され、生きると云うにおいて下され。とそんな行事もやったそうや。豆木に鰯の頭を刺して細い紙に鬼の顔を書いて、平年は十三ケ月、閏年は十二ケ月と月を互えて書いて、豆木に刺す庭で豆殻を燃やし燃える火の上で「なに焼くか焼く、しゃべり婆の口焼く。」と三回唱えながら少し焦がして家の廻りに刺しておきます。そのうち、どこの家でも福は内の声が聞えて来ます。

豆を枡に入れて家の中を「福は内、福は内」と撒いて最後に玄関口で大きな声を張り上げて「福は内福は内。鬼は外。鬼の目打ち出せ。」と云って戸を閉める。それがすんで外へ出ると鬼になると云って暫く出なかったとさ。

鬼が豆を拾いに来て「今年は十二ケ月じゃ十三ケ月とは可笑しいな。」と首をかしげていたそうじゃ。神棚の前で枡に入れた豆を後に手をやって、目をつむり年の数だけ豆を掴む。なかなか掴めないが、もしかすると掴めることもある。それを紙に包んで今なら十円、昔なら一文入れて四辻に捨てる行事をやる。これが厄払いと云ったそうな。今でも禅派の家ではやるところもあります。

絵絹の生産

絵絹生産の手順としてまず糊付けから書いてみます。

この方法は糊をつけることによって黒色がよくつくという

ことで、画家がよろこぶところから永縄七太郎氏が元祖といわれていますが、まず白米を一ケ月ほど水に浸してから石臼でその米をひいて粉にし、それに糊の腐敗を防ぐためロウを入れて釜でたき米糊を作ります。

生糸をその糊水に一晩つけて、翌日脱水し、日光で乾かし、ぜんまいで枠に繰り現代では整経機で繰糸を作り、手織機で糸かざりを通し、筬に縦糸を通して手織機で品物を作ります。

織機は大正四年頃は電力となり、力織機から自動織機になり、現代ではレピヤとなりました。生糸には規格があり、十四デニール、二十一デニール、二十八デニール、四十一デニールが主に使用されます。織物はすべて曲尺で計算され、縦糸は曲一寸に四〇〇本、横糸は七十デニールを管巻機で管に巻いて密度九十五回打ちで、製品が出来上がります。

日本美術院展、日展旧文帝院、日本書道美術院展覧会にも出品されたり、その他広く一般に使われます。曲尺で丈は七丈五尺巾、種類はその他いろいろで一尺巾、二尺五寸巾、三尺巾、三尺三寸巾、四尺巾、五尺巾、六尺巾などあります。

現在絹絵生産の織機台数は五十三台、戸数十七戸、生産数二万九千六百四十五疋、年間売上金三億七千百九十八万円程になります。

次に絹織物、絵絹のあゆみを書いてみます。明治の初め頃には、そだいという絹織物の名前でよばれ、明治三十二年に岐阜県絹同業組合を設立して絵絹羽二重塩瀬の部門で、旧羽島郡中屋村が主体となって全国的に販売されるようになりました。

大正十年ごろには成清、神置とで美濃絵絹株式会社が設立され（社長永縄金三左門氏）東京、京都をはじめ満州、朝鮮、台湾などへの輸出、販売、出荷され、絵絹生産が盛んになりましたが二ケ年で解散となり、昭和の初め頃には旧中屋村を主体で、絵絹生産組合を設立して、機屋戸数も四十戸、織機台数は実に百七十台になり、過剰生産気味になってしまい、休機十日間とか割当生産とか複雑になり、昭和九年に絹工業組合が設立し（理事長松原治助氏）元の絵絹羽二重塩瀬と紋羽二重との部門となりました。昭和十二年支那事変が始まり、昭和十三年には申し合せで小組合制度となり生糸は国産品でありながら、ぜいたく品であるとして生産調整をしなければならなくなりました。昭和十六年には大東亜戦争に発展し、絵絹の生産は三分の一ほどにならざるをえなくなり、大変困

難な生活を余儀なくされました。

昭和二十年八月十五日の終戦をむかえた時には絵絹を買う人もなく、生産台数は十台前後にまで落ち込み、昭和二十三年に進駐軍用の絵絹として、絵絹の生産が日毎に増産され都市の復興につれ、新築住宅、観光旅館、ホテルなどの床の間に絵絹の需要がふえはじめました。

しかし現在では一般住宅も洋風化し、日本画等の表装も額装に変り横物大流行となりつゝあります。

この絵絹生産の基礎を築いたのは、いつ誰が考え出されたのか、その人の苦心惨たんの結果いくつかの時代の繁栄にもたらした意義を考えると、今日の絵絹の近代的な知識を与えてくれた祖先たちの技術の伝承に敬意を表して、さらにわれわれは新しい技術をみがいて次の時代に伝承していかなければならないのだと思います。

自家製　麺としるこぼち

一、麺

太古の昔から、農産物の主なものは米につぎ大麦、小麦である。大麦は米につぐ主食であるが、小麦は製紛して加工食品の原材料となり、その使用される範囲は実に広く、その使用量は、まさに米の消費以上ではなかろうか。

農村生活は、自給自足がモットーであり、自然に素食なものとなり、明治の年代から、大正の中頃まで農村の常食としてつくられた「製麺とシルコボチ」について紹介しよう。

(イ)製麺（うどん）に必要な五道具から

1. ベニコ（陶器で直経30吋位大鉢）
2. 板をつなぎ一・三米四方位
3. メンボー（直経3吋位　長さ一・三米位）
4. ナガタナ（包丁）
5. 竹の箸

原料は小麦の粉

以上の小器具は何れの農家にも常備されていた。

(ロ)作り方

先ず適当量の小麦紛をベニコに入れて、徐々に水を加えつつ、竹箸と手によって、粉をよく練りこの練り加減が、技術の第一歩であろう。経験を生かして硬軟なく、適当に練り固

めてから、準備してあるウチバンに原料と同じである、小麦粉をまいて粘着しないようにする。この上へ練りつゝある一丸となった小麦粉を出して、手によって力をこめてよく練りあげてから、メンボーを両手にとって、トンチャン、トンチャンと数十回くり返して、ひろげて、小麦粉をふりかけて、またメンボーに巻きつけ、またひろげて、適当なねばりをつけ、その後、二、三ミリの厚さにのばしてウチバンいっぱいに広げる。のばされためんは薄いところ、厚いところ少なく、穴があったり、ちぎれたりしてはならない。うちばんいっぱいにひろげたところに、小麦粉を何回となくふりかけ、またメンボーに巻いてから、そのうちばんの一辺のところに包丁の巾位にメンボー巻きから徐々にときつつ、折り重ね、その後包丁をもって、うどんの巾位にきざみ、手に力を加えることなく、極めて軽く、動作しなくてはならない。また延ばすとき、刻んだりするたびごとに、うち粉といって、新しい小麦粉をふりかけつつ、生麺に造りあげるのである。

(ハ) 食膳には、生麺にできあがったものを湯で、つけ麺にする場合もあるが、その多くは煮えつつある味噌汁の中へ、いかき等にうけて数筋づつよくほぐして入れ、火を強めて沸騰させ、野菜、あげとともに煮つけうどんとして主食ともなり、また副食としても晩秋から冬にかけ、暖かく、食膳に供したものです。

二、しるこぼち

これは、生麺よりも極めて簡単であって、即席的であり、またつくるに暇がかからない。べにこの中へ適当量の小麦粉を入れて、竹の箸または手によって、水を加えつつ適当な固さによく練って、(どろどろに近い) 煮えつつある味噌汁の中へ、手またはしゃもじによって、親指の頭大に、ちぎって、落し入れるとともに、油あげ、野菜などを加えて、味噌汁を沸騰させてのち、適当なあたたかさを見はからって食膳に供するのである。

三、むすび

いずれにしても、昔からの農村の食生活の一環であるが、農繁期の秋のとり入れ時ともなれば、主婦は乳児を背おって、田圃から帰ると同時に、あかぎれの手で夕餉の仕度はほとんど味噌汁であって、とんちゃん、とんちゃんとゾロ (生麺) をつくったものである。

ゾロをつくる時間のないときは、しるこぼちをつくったも

のである。農村の生活の態様も、食生活において、特にかわり、その技巧の進むにつれて、専門的な企業ともなって、機械化となり、和・洋、共に麺類は、主食となりつつあるが、前述の技術の伝承は受けつぎ、もののない時代の昔話となった。

現今においては、農産物にいたるまで輸入依存しているが、パンはじめ菓子類の殆んどが小麦である。旧蘇原町において、田の裏作、新しく開墾の畑は、小麦作のみであり、毎年農協のみにしても数千俵の集荷がされたが、現在では僅かに百俵前後であり、国民の食料の自給自足はまた遠いむかし話となった。

民族的風習について

市民憲章第一項に、自然と文化を守り、美しい町をつくります。

樹木や草木を大切に、緑の町をつくりましょう。川や道路をきれいにしよう。空地の雑草をかりとろう。文化財を大切にしよう。

市民の実践活動目標としていることは、皆さんも既にご承知の通りであります。県内のある町においては、老人を敬い、青少年が健全に育つ町をつくりますと、その実践目標に定めているところもあるようです。

実に老人に対する、敬愛の念が表現されているように思います。

当市においても中央公民館の表玄関には、"老人のための明るい町"と標語が等身大の標柱に掲げられて、われわれ老人は、大きく期待するところであります。

さて、私たち老人は、戦前、戦争中を通して国家の目的完遂のために、衣食の不足も省みることなく、また多くの犠牲者を生じ、終戦の詔勅によって、終戦即敗戦になって、新しい憲法のもとに諸施政によって、平和が今日求められ、そのうちで、学問的文書になく、文献等には直更ない民族的進度と、利害得失等を究めて、これを子孫や若者に伝承させるように考えます。

例えば、冠婚葬祭のあげかた等々、衣については、マント、ヒキマワシ、タスキのかけ方、その色合、ハッピ、モモヒキ、ハラカケ、ハバキ、ヘコオビ、カクオビ、マエカケ、ハチマ

キ、ホホカムリ、マゲの結い方、マルマゲ　イチョウガエシ、メガネ、オサラ、フンドシ、コシマキ、(年頃に合わせての色合い。)

次は食について、

箱膳の使用、夕食時の親、子、嫁の座る位置、食時限の配分、アサメシ、コビル、ヒルメシ、オソシユウメシ、ヤショク、ボケ、ゾロの作り方、アワキビの食べ方等いろいろな慣習がある。

住については、従来の家の造り方と、その間取り、各室の名称には、ニワ、オカッテ、ダイドコロ、エンサキ、アガリハナ、ブツマ、シモダイドコ、コウエ、ナンド、エンガワ、クラハイゴヤ、ウマヤ、かや葺きの合掌造り等があった。

職業上、また生活上においても、農業でいえば、ナワシロ、タウエ、ノヤスミ、アマゴイ、カイクサ、カリヨセ、トオスビキ、サナブリ、アキアゲ、オケ、タル、タライ、大八車、ニナイ棒等がある。

葬式の途中、行列と、その役割り、順序と火葬、土葬等々、日常の生活において、不思議もなく、またそれだけの注意心もなく、行われつつ、ある事柄を単なる口伝えでなく書きつけて、その中には経験に基づく生活の知慧も含め、若者に伝え将来の文化に寄与することが大きいと思います。

ひいては、このことは国、市町村の行政上にも、地域づくりの核ともなり、また文化の行程を探ることとなるでしょう。

わが美濃の国は、関東と関西のわかれ目であって、また、朝廷と幕府の権威の境目でもあって、しかも、双方共に遠くて、その文化の開発はおくれており、それに加えて、織田信長の稲葉山の焼討ちなどによって、名所旧蹟も比較的に新しくはないように思われます。

京都、奈良鎌倉は、現在古都保存法によって守られ、古都の姿を今に伝えています。

現代建築をしのぐ大きな屋根、五重三重の塔、ひっそりとした中にたたずむ神社仏閣は、私たちに、安らぎをあたえてくれる文化財のすばらしさを感じさせてくれます。

あわせて史蹟旧蹟の文化財として扱われているものの多くは、政治上の怨怒を鎮魂のために創建が行われたようにも考えられます。

藤原朝臣たちは、ざんげんによって、菅原道実を太宰府に追放し、その怨霊を北野の天満宮として藤原氏自体が創建し、

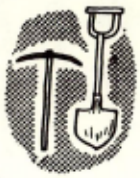
また、東大寺は聖徳太子のために、国中の大事業であったらしい。

信長の最後の戦術は焼き打ちで稲葉山も、この手で落城させ、この一帯はまる焼けとなり、農耕住民は生活もできない、神社も寺も全部焼けているために、手力神社に千三百町歩の土地を寄進して、この戦禍のための犠牲者の鎮魂と、食えぬ農民のために土地も免じて農耕させ、また薪をとらせたのでありましょう。

さて、脱線しました当市は、濃尾平野のどまん中に位置し、各産業に適する立地条件もととのえているために、新しい産業で軍備の拡張時には最新鋭である飛行場の新設によって、飛躍的に開発されたといっても過言ではないと思われます。

われわれ老人層は、日本の躍進期で復興期を通して生きぬき、各産業は機械化されて、実に省力の時代でありますので、その余暇を利用して、往古の地域の文化面を掘り起こして、次代の若者たちに伝承させまた解明のヒントをつかみ、よりよい民族進展と確立を遂行しようではありませんか。

技術の伝承



製瓦の技術

◎はじめに

わが各務原市の古代産業のうち最もその存在を留めているものは、窯業であり全国でも有数な須衛器の特産地であった。美濃の国の窯業の中心は当市内であってその窯跡は鵜沼地区から各務、蘇原、那加地区を経て岐阜市の芥見、日野へと続き、この一連せる山の麓に多く見られるこの古窯群の中心は須衛地区である。初見の時は明らかでない奈良時代が最も盛んで平安の末期まで須衛器を主に焼いている。これが原料の陶土に適するものは無尽蔵ではなく、また大量に必要な資材燃料の割木や薪もおそらく採りつくされて東濃方面に陶土燃料を求めて移転し開拓したのではなかろうか。

須衛器の製造と並んで平坦部で採取のできる粘土を原料に陶器よりもエネルギーが少くて焼成可能な粘土瓦の製造が行われていたように思われる。その証拠となるところは県下で

も有数といわれている那加柄山の瓦古窯跡がある。当時岐阜瑞竜寺の地にあった厚見寺の瓦がこの柄山で焼かれていることが出土瓦の破片と文献によって立証されているが昭和三十三年ごろ後藤ヒョコ建設の地均しのために古窯跡の原型はなくなっている。

殆んどの瓦の窯元は零細的企業ではあったが農業に次ぐ唯一の地域的産業であって農閑期における農外収入の源泉ともなって当時の青壮年層の人々が関連している。

大正の初期頃には須衛東門を中心に窯元約四〇、職人およそ三〇〇、馬車約三〇、季節的労務山仕事土掘り運搬埋戻し等々の労務者は二〇〇ないし三〇〇人は数えられ、製品の月産三十万から三十五万枚、金額にして千二百万から千五百万円位かと思われる。その多くは地元および愛知県の北部が主な販路となっていた。昭和の初期頃から軍の作戦計画の下、軍政時代に突入したために平和的産業は置き去りの状態になって、次第に業界は衰微の運命をたどり、休廃業するもの多く、現在三、四軒の窯元が残っているに過ぎない。

◎粘土の採取と燃料の確保

原料となる粘土は田圃の耕土若土の下にあって深い浅いの差はあるが層をなしている。十二月から翌年の三、四月までの農閑期を利用して採掘するのであるが、窯元は田の所有者と事前に契約を要しその方法には田の面積によるものと掘り上げの量によるものとがある。一応契約の終った窯元は土掘人夫に請負わせて、田の所有者の来年の田植えに支障のないように埋め戻し、また常傭の人夫によって一年間の所要量を積み込むのであるが、採掘される粘土の良否と粘土層の深浅によってコストに差を生ずることとなり実にウンプカンプである。

須衛瓦は凍てに強く耐えることが特長であり、その反面光沢が少ないことが損徴であるので商品価値が少なくなるために瓦土の配合については長い経験による技術と勘によることといえよう。何れにしても土の良否によって製品に及ぼす影響は大であるために事前調査は大切である。農閑期中に採掘するためにその作業は一斉となるが労務者の調整も自然に行われ、各々大八車を持って土掘り現場で運搬に、また埋め戻しと一日中何回となく繰返し天気のよい限り殆んど繰返されて窯元の所要量が充たされるのである。

◎燃料の確保

山仕事は従前から山師と云って中間的存在の商人があり、山の並木を買って用材、割木、薪に仕分けて窯元に売るものと、窯元が所有者から直接買って人夫を使役して年間の使用量を確保するものとがあるが、土掘り作業と同じように冬から春にかけて行なわれる。しかし割木薪の生産には限度があるために大正初期から九州、北海道産の石炭が使用されるようになり、窯の改造と共にその燃料は石炭が大部分になったが、尚割木と薪は技術上なくてはならない重要資材ではある。

◎製瓦作業工程

各製瓦工場の横側に備畜されている粘土をサキッチといって、これを細かく切って約二千キロ位をハコと云う縦横深さ約一米半位のサキッチで固められた中に切ったサキッチを固くつめ込み、その軟かさの均衡をとるため適当な水加減を要するが、これもその経験と勘によるところが多い。あくる朝から特殊な備中鍬をもってハコの中から削り出し山にもって数度に亘って削り、これによって打ち何度も何度も繰返してよく練りあげるのであるが土の配合は勿論である。製瓦工程中一番の重労働であって実に体当りで真冬といえ共褌一つであり、特に体力のある人が受持っている。弟子も協力して晩までにアラジ五百枚前後の分をタタラに盛りあげる作業である。この工程は大きく非能率的であり、且つ土の練りが粗であるために、大正の中頃からモートル又は発動器による土練器アラジ器が導入されて能率は倍加し、労力においては大きく省力された。なお現在では機械が精密化されてその能率においてもその比ではない。

◎アゲ師の工程

土打ち工程が終ってタタラに盛られているところから小道具を使って瓦一枚分宛を針金で切って、木で造られている型にアラジ四枚を重ねて受け取り、定められている場所に立てるこれをアラジとりと云う。全くの手加減であってはぎとるとき、日蔭に立てるとき等は実に経験と熟練なくしてはできない作業であるが数時間にしてめくってしまい、あくる朝日照に出して適当に固めて工場内のアラジ置場に三段に積まれる。一夜明けてから桧で造られている瓦の原型にアラジをのせて回転させながら特殊なカマを用いて切り落し、或は磨かれるまでタタキ・ヘラ・水バケを用いて、白地とするまで固さ加減とアラジの無駄も少なく、しかも行儀よく工程中の破損も少なく日照・風の有無等経験と勘によるもの多く、瓦の

原型はあるとはいえ実にその技術の伝承である。然る後各々白地として白地置場に積み込み、窯元にその数量を渡すまでがアゲ師の部署となる。この工程においても土練器、アラジ器の導入後二、三年にして手働又は伝動装置による各種の製瓦機が導入されて製造能率の上昇と省力の面は整いつつもその反面軍需産業が盛んとなって職人、一般労務者は共に軍需工場に転出するために、その労務者不足を機械によって補われつつあったが、益々軍需時代となって平和的産業は不振となり、尚満州事変の発端となったために人的不足を伴い先を見越してボツボツ休転廃業の兆が芽生えつつあったのが昭和六、七年頃である。

◎瓦の種類と職人

普通住宅倉庫の屋根材料は普通瓦であるが、神社の拝殿お寺のお堂は特殊瓦を使用する場合が多い。

普通瓦には縦横の寸法の長短によって本五六版、五六版、六四版、七二版の四種があり須衛瓦にあっては厚切五六版である。

瓦の類別

軒瓦　袖瓦　角瓦　ノシ瓦　冠　紐丸　隅切　巴　鬼瓦

軒瓦と袖瓦には

無地軒　唐草　一文字　巴付　軒高　キザミ　ミセカケ　本カケ

ノシ瓦には

並ノシ　厚ノシ　大名　アマキリ

冠には

並冠　京冠　江戸冠

鬼瓦には

モツコ型　小笠原型　影盛　京の巻型

平瓦は目板といって種類はない。

鬼瓦の京の巻　袖の本カケ瓦は神社仏閣に使われ特殊と云えよう。

特殊瓦定紋付等は限りなく発注があれば造ることは可能であろう。

職人には

土打ち　アゲ師　アイバ師　鬼師

土打ちアゲ師については前述

アイバ師

紋物師ともいわれ紋瓦相互の接点や模様付の巴ミセカケ、

本カケ等の屋根の勾配に合はせてその模様や文字を下から見て傾くことなく造るの重点を呑み込んでいる要すればアゲ師の指導者格である。

鬼師は

職人中その数一番少く一人で数軒の窯元を廻り、その技術においては親方からの伝承であって型とてなく屋根の勾配に合わせる如く各種型を想定し又生物等は全くの手造りである。

以上職種において異ってはいるが何れも指導機関又は研究機関は全くなくて親方の指導と経験の下にその土質と工程中における土の固さ加減に乾き加減、日照の温度高低、風の強弱その方向等あらゆる自然現象に合わせつつ見よう見まねの技術の伝承に外ならない。

◎築窯と窯炊き窯開け工程

築窯　位置の選定ではその地盤の土質が耐熱力に最も強く且岩盤でないことを条件とし、又工場や製品置場にも近く尚水の便、燃料置場とも遠くないところを選び且つ日照と風向等にも配慮を要しなければならない。

窯の炊き口は東西を原則とし長さ凡そ五米、窯巾の中心の巾経一八〇吋四角に白地を五条五段（東西は山形となり南北は垂直となる）に立てて一枚一枚にコマを以て間隙をとって積み込まれその両方即ち東西に白地から約一・五米隔てて炊口を設け、深さ凡そ一米余り掘って火袋から熱道五条が東西共に火を誘導する如く窯床に対向して造られ煙は南北の窯の出入口と窓によって排煙される。この火の道をタニといって白地の積んである底辺に西と東から熱量を送ることとなる。タニの反対の斜面が窯床であって炊口が連り通風口はその下横に設けられる。積んである白地には既に焼けている屎瓦で覆い壁泥と割れた瓦を材料として築窯専門の職人七、八人が二週間を要し窯を炊きつつ壁泥を十数回塗り重ねその厚さ六〇吋以上となる。内からは火力、外からは天日によって乾燥させつつ焼き上げられるがこの瓦は構築の材料であって商品価値はない。

◎窯炊き

窯炊き職人は復数の窯元を兼ねて窯炊き窯開けの作業に従う専門職と云えよう。製瓦工程中最後の総仕上げであってこれができふできによって製品の良否と燃料の効率的な消費が双肩にあって直ちに窯元の利害に関係すること重大であり、

且つ製瓦の生命ともあってその責任も重いものがある。

この工程にも指導書も温度計もなく親方からの伝承と自己の体験によるのみであって天候風向き土質と積込みの瓦の種類等又燃料の熱の効率の差によって、その窯毎に応変の処置が主要である。一窯毎に製品の差ができないことを主標としているが一定の工程の順序のみではできない。その重点は窯内の天地の火の色合いを素とし、尚焼きつつある白地は焼けるに従い縮むのでその程度（俗にサガリという）を確め窯一杯の火の色とサガリの程度の一致をみて窯止めとなるが、この一瞬こそ実に技術と云えよう。窯炊く時間は午後に火を入れ（アブリと云う）明る朝から七、八時間炊き続け、前述の時点において止める。この場合通風口は密閉し排煙口は極めて小さくして、東西の火袋に薪と割木を約五十瓩宛百瓩をつめこむ（これをコミと云う）然る後両炊き口と、排煙口は泥を以て密封するが排煙口には指先大の孔をあけ排気するが数時間後にはこの孔も止めるこのコミをするときが最高熱量であって約千度前後といわれている。

◎窯開け作業

窯を止めて後一日と二夜を過ぎ早朝から窯開けとなる。まず相当量の水を両炊口から同時に打ち込みコミとして押し込んだ割木の炭化したものをかき出す排煙口も南北同時に壁泥を落してからカナマタを以て両方からはさみ出すのであるが、また相当の熱があり巨大のサツマイモなら寸時にして焼けるが次第に熱は低くなり上から三段はカナマタを使うが二段（コシと云う）一段（チと云う）古草履等でつかみ出すのである。一窯の製品は千枚が標準とされていた。この作業を午前中に終り後窯の準備に自地の積み込みと今出した製品を等級別に選別し十枚宛結束し夕方までに終る。この作業は大体四人乃至五人位で行なわれる。

選別の等級には別上並上・大・〇の四段階とする。瓦が銀色を呈するのは粘土に含まれているアルミニウム分が熱のために表現するといわれている。焼けのよいもの程金属音を発し表面の銀色に艶が増しているが科学的には業者はわからない。この窯炊き窯開け作業は窯元の伝承ではあるが人不足もあって一概には云えない。

◎むすび

現今当市北部は昔からの縄張地帯であって十数年前から土地改良区の行なう圃場整備前までは条里制の区画が保たれて

いたことから農業の開発も早くから行なわれたことと思われる。この農業に次ぐ製瓦事業は須衛各務の小範囲ではあるが地域産業として盛んであって原材料瓦職人運送業季節労務者も地元において賄われその製品の名声も高められつつあったが、業界は不幸にも軍政時代に突入のために軍需産業の発展に連り青壮年層の働き手が殆どが軍需産業面に転出し製瓦事業に就業するものがなく、随って補充もできないのみならず平和産業の不振等が重なったために機械化を図り又窯の改良等その施設の充実をされつつあったが満州事変の遂行のため益々製瓦業界は不振が加わって、遂に転廃業するのも多く昭和十年頃が最も多く続出し続いて維持するものは稀となった。

昭和三十四年五年の経済培増政策と共に変度成長時に呼応して建設ブームとなり、業界の先進地においては企業合同による資本の増加を計り、更に精巧な機械の導入と共に白地の高慢乾燥又窯は屋内に構築して陶器窯に優り、その燃料は重油となり又プロパン瓦斯となって窯も全く原型もとどめていない金属石綿耐熱練瓦を材料とする箱型窯に替え温度計による科学的なものになりつつあって、非常に省力化して大量生産ともなり、又その製品は塗料によるカラーとし陶器化されて大需要にも対処しての大躍進されつつある時伝統ある須江瓦の市場権は遠く見込れないまま歴史的郷土産業の保持とまだ残されている埋れた資源の開発とその技術の伝統と共に当時の農村生活の様態を孫々に伝えたい。

方言

（五十音順）

各務原市の方言

あ

あっちゃべた　あちらがわ
あばばこく　おぼれる
あんね　姉
あかんべい　ばかにしたしぐさ
あかいべべ　よいきもの
あかへん　いけません
あかんがえ　いけません
あすんぢょらへん　あそんでいない
あいさ　間
あからかす　こぼす
あがりゃー　上りなさい
あっくい　かかと
あのなも　あのねー
あやすい　かんたん
あよぶ　歩く
あんじる　しんぱいする
あのじん　あの人

い

いなみ　みなみ
いこまいか　行きましょう
いややけど　いやですけれど
いきんさい　行きなさい
いかき　ざるのこと
いかすか　いけません
いかっせる　行きなさる
いがむ　曲ること
いきむ　力むこと
いきる　むし暑い
いび　指
いやがらかす　いじめること
いろむ　じゅくす
いわっせた　言われた

いこせ　ください・くれ

う

うまくさい　具合がよい
うらがやす　裏返す
うらっぽ　先の方
うでる　むすこと
うむす　むすこと
ういこと　気の毒
うないどし　同じ年

え

えらいこっちゃ　大変なこと
ええべべ　よい着物
えなわ　腸
ええなも　よいこと
えらい　立派・苦しい
えか　念を押すこと
ええか　よろしいか

お

おまはん　あなた
おそなった　おそくなった
おそがい　おそろしい
おいでやす　いらっしゃい
おっかあ　母
おっとう　父
おとぐち　玄関・入口
おいねる・おぶ　背負う
おくんさい　下さい
おどくる　おどる
おこまいか　止めようか
おそえる　教える
おっちょこちょい　軽はずみ
おもたい　重い
おりゃせんか　居ないか
おらん　居ない
おんし…は　君は
おさい　副食

おんなじ　同じ
おんぼ　尾

か

かんこ　下駄
かんじょう　計算
かええ　かゆい
かかっせる　書くこと
かざがする　香ひがする
かたくろ　隅の方
かったるに　買ってあげるから
かねして　ゆるして
かまう　いじめる
からかす　枯す
がいきひく　風邪ひく

き

きつい　ひどい・強い
きたげな　来たそうだ
きやす　消す
ぎっちょ　左キキ
ぎゃあろ　蛙

く

くっちょる　食うこと
くそだわけ　馬鹿にしたこと
くろ　隅のこと
くくむ　含む
くだれた　もらった
くっくとやる　熱心にやる
くらわせる　なぐること
くるう　たわむれる
くべる　燃すために入れること
ぐるり　周り

け

けど　然し
けつ　お尻

けつまずく　つまずく
けなるい　うらやましい
けっからかす　けること
げんげ　れんげ草

こ

こっちゃべた　こちらの方
これやろか　是を上げよか
これやろか　こちらから（仕事）始めようか
こっちいこい　こちらに来なさい
こうらいきび　とうもろこし
こけ　馬鹿
こぎる　値ぎる
こうえ　離れ座敷
こうとい　地味
こうへん　来ません
こく　言ふ
こきゃがる　馬鹿にしたいい方
こそばええ　くすぐったい
こすか　来るもんか
こずらにくい　こにくらしい
こないだ　この間　この前
こばる　配る
こんき　熱心
ござった　来なさった
ごがわく　腹がたつ
ごめやす　ごめん下さい
ごんぼ　牛蒡

さ

さびしい　寒い
さっき　先程
さいなら　さようなら
さきっぽ　先の方
さぶしい　さみしい
……ざいが　……すると
さかしま　さかさま
ざい　ちりはらい

ざいご　田舎

し

しまえた　終った
しいし　おつゆ
しゃちやく　世話やく
しんしょ　財産
しんさい　やりなさい
しょっちゅう　いつも
しょんべ　小便
じいも　里芋
じゃっこ　雑魚
じだ　地面
じゃれる　たわむれる
じっきに　すぐに
じょり　草履
じるこい　湿ったやわらかな地面
じだんだふんで　くやしがるようす

す

すたこく　こんわくする
すぐに　ただちに
する　（ひげ）をそる
する　使い果す
すんでに　もう少しで
ずつない　苦しい
ずうっと　まだまだ（遠い・近い　大きい・小さい）

せ

せこ　田舎の出入道
せいちょる　急ぐ
ぜぜ　銭

そ

そうじゃったげな　そうであったけれど
そうかなも　そうですか
そうそと　静かに

そそ　衣類の裾
そうせると　そうすると
そうましい　やかましい
そうやっとけ　そうしておけ
そっちゃべた　向うがわ
そうれん　葬式
ぞろ　うどん

た

たわけ　馬鹿
たんと　沢山
たいだい　わざわざ
たいもない　とんでもない
たった　僅か
たんび　都度
だく　抱く
だだくさ　粗末
だちゃかん　駄目
だいつう　いきな・すいな

（戸）たてる　戸をしめる

ち

ちゃっと　早く
ちょこっと　少し
ちょぼっと　少し
ちいと　少し
ちゃんと　必ず
ちぢかむ　ちぢむ
ちょっとも　少しも
ちょう　下さい
ちょんか　下さい
ちょうすく　いばる
ちょろまかす　ごまかす
ちんびきさい　小さい
ちょうず　便所

つ

つんぼく　耳の遠いこと

つっつと　早く
つくねる　積むこと
つましい　質素
つくなう　しゃがむ
つよ　つえ
つるくる　つるす
つっからかす　休む間なくつっつく
つまらん　あほらしい

て

てまい　お前・君
てっぺん・てんぺつ　頂上
てんぺつかご　小さい竹かご
でんぐりかえる　回転して倒れる
でがない　量がない
でかす　作る
できすか　出来ない
でこ　人形
ですこ　ひたい
でくわす　出会う
でほ　でたらめ

と

とろくさい　阿呆な
とらまえる　つかまる
どんぼ　阿呆
どだわけ　阿呆
どんだけ　どれほど
どいてくれ　よけて下さい
どうぢゃ　どうですか
どうぞこうぞ　どうにか
どえらい　大きい
どべ　最終
どもならん　困ること
どけ　よけよ
どろべったこ　泥まみれ

な

なんぞ　何か
なにこく　何言う
なにぬかす　何言うか
なまかわ　なまける
なんでか　色々沢山
なんでや　なぜか
なんのこっちゃ　何と云うことか
なぶる　さわる

に

にがく　みがく
にぶい　感の悪いこと
にすい　感の悪いこと
にわ　土間
にき　かたわら

ぬ

ぬかす　言うこと
ぬくとめる　暖める
ぬすと　盗すびと

ね

ねぶる　なめる
ねき　かたわら
ねぶたい　ねむい
ねんさい　ねなさい
ねぐさる　腐敗する
ねえ　姉
ねっから　一向に
ねしま　寝るまぎわ
ねぶか　ねぎ

の

ののさま　ほとけさま
のーなった　無くなった
のぐ　脱ぐ
のっけから　初めから

のやぎ　着る物をつまみあげ短くすること

は

はい　蝿
はきもん　履物
はすかい　ななめ
はだてる　広げる
はる　体の一部をたたく
はまる　落ちる
はんぶはんちゃく　中途半端
ばんげ　夕方
ばか　少量・これぽっち
ばんこ　こたつ
ばんげしま　夕方近く
ばばい　汚い

ひ

ひしゃける　つぶれる
ひちくどい　くどくどしい
ひびがはいる　割け目が出来た
ひぼ　紐
ひときり　少しの間
ひらくたい　平ら
ひょうげる　おどける
ひょろながい　細く長い
ひとつんつ　一つずつ
ひかる　叱る
ひやける　浸す
ひょっとすると　若しかしたら

ふ

ふすべ　ほくろ
ふすべる　いぶす
ふしゃく　柄杓
ふんと　本当
ふるしき　風呂敷
ぶらくる　吊す
ぶくり　高下駄

へ

へんび　蛇
へいともない　とんでもない
へっつける　つなぐ
へらかす　少なくする
へねくる　いじりまわす
へんてこな　変な
へんねしい　ねたましい
へっこむ　くぼむ
へる　避ける

ほ

ほかる　捨てる
ほとびる　したすこと
ほおたぼ　頬
ほところ　懐中
ほうたがい　見当ちがい
ほったらかす　ほっておく
ほれから　それから

ぽうやい　追いかけっこ
ぽてふり　屑屋
ぽろつく（雨が）　ぱらぱら降る雨

ま

まっちょれ　待っていて
まわし　準備
まめなか　元気か
またおんさい　又来て下さい
まま　飯
まぜてくれ　仲間にして
まつぼり　へそくり
まんだ　まだ
まっと　もう少し
まんるくたい　丸い

み

みちょれ　見ておれ
みそつけた　失敗した

みのくい　見ること困難・見苦しい
みんさい　見て下さい

む

むかつく　気にさわる
むいから　麦の柄

め

めめぞ　ミミズ
めんどくさい　めんどうな
めんげらしい　賞めることば
めんつ　顔
めんつ　雌

も

もみくちゃ　もみ合う
もちかねほす　もてあます
ももた　もも
もおやい　仲間
もっさらこい　乱雑

や

やっちょる　している
やけずり　ヤケド
やっとかめ　久し振り
やっとこさ　ようやく
やわこい　やわらかい
やんばよう　具合よく
やっぱし　やっぱり
やりにかかる　仕事を始める
やれえへん　出来ない
やらしい　恥しい
やらしい　いけない

ゆ

ゆうなべ　夜仕事すること
ゆうだち　雷
ゆうらしい　ゆったりしている

よ

ようさ	夜
よっころ	よほど
ようなべ	夜仕事すること
ようやらん	出来ない
よばる	呼ぶ
よだるい	疲れてたるいこと
よったいな	悪い
よしたる	仲間にいれてやる
よばり（年）	数え年
よる	選ぶ
よばれる	馳走になる

ら

らっしもない	乱雑な
らちがあかん	方法がない

り

りょうみる（魚）	料理

ろ

ろれつ	舌

わ

わっち	私
わし	私
わやく	無理
わらかす	こわす
われんとらあ	お前達
わかっちょる	わかっている
わかれへん	わからない
わしんとこ	私の家

対話例

（年末の郵便局にて）

老婆　へえ、今日は、ええお天気やなも……ぜぜおろすとこは、ここかなも。

局員　はい、こちらでございます。まいどありがとうございます。

老婆　孫に、お正月の服をかったらんならんでナモ。五千円おろいてくんさらんかナモ。

局員　はい。この受領記に書いてください。

老婆　わっちゃ、あんばようよう書かんでナモ。おまはん、すまんが、一寸かいちょくれんさらんかナモ。

局員　上手、下手はかまいませんから、書けたら書いてくださいよ。

老婆　そんなら、かかしてもらおうかナモ……　これでええかの。

局員　はい、これで結構です。通帳と印鑑をおかし下さい。どうもお待たせしました。

老婆　おおきに。ありがとうえも、おまはんもええ正月を、迎えちょくさい。

執筆・編集者名簿

氏名	住所	電話
村上　藤枝	各務原市那加信長町	八三―〇六二九
坪内　正雄	〃　〃　桐野町	八二―三六二〇
山口千代子	〃　〃　日之出町二―四一	八二―〇八二〇
岩田　英一	〃　〃　楠町二丁目二四	八二―〇一〇三
永田　得一	〃　蘇原坂井町三―二	八二―〇五四七
岡野　末広	〃　那加北栄町	八二―二四四〇
柳原　かう	〃　蘇原早苗町七七	八二―五九八八
中村いそゑ	〃　那加門前町二―四三	八二―〇四一〇
中山　千代	〃　〃　住吉町二―二一	八二―一七三九
佐曽利七郎	〃　〃　昭南町八八―五	八三―二七〇九
木村　管一	〃　蘇原六軒町三―四一	八二―二〇七七
平光　敏子	各務原市那加桜町一丁目一三二	八二―六六〇三
杉谷紀代子	〃　〃　住吉町一―一〇	八三―六八二四
今尾　香	〃　〃　新加納町二六五一	八二―三三八〇
桜井　寿秋	〃　〃　東那加町四七	八二―五〇一八
浅野　ヒデ	〃　〃　新那加町一六	八二―二五七〇
岡田　満	〃　〃　桜町二丁目	八二―一〇七五
宇野　ちよ	〃　〃　本町一四	八二―〇二三〇
浅野あきゑ	〃　〃　長塚町八〇三―一	八二―四七八九
松尾　松司	〃　〃　神置町	八二―〇三九八
森　巌	〃　〃　成清町一一一二	八二―一三四四
坂井　幸子	〃　〃　鵜沼西町五〇七二	八五―〇一六九
早川きみへ	〃　〃　須衛八丁目一九四九	八四―一四七一
生涯教育センター 長澤　綾子	〃　蘇原青雲町二丁目七―一	八二―六二六七

あとがき

ふるさとを よく知ること、古くから伝えられてきた遊び、うた、伝承技術、ふるさとのはなしことば、方言など、先輩格である 今生きている大学院の皆さんの手で後世に残し、伝えたいとの願いをこめて「むかし」に取りくんでみました。

伝説とか民話については いろいろな考え方もありますが、この中から何か少しでも心に残り、お役にたち、豊かな創造力が 育つならば と思い、今年度の高齢者大学院の大きなまとめとして発刊させていただきました。

さらに後につづく大学院の皆さまで 第二集、第三集と発刊していただければ幸いと存じます。

むかし　第一集

編　集　各務原市高齢者大学院生一同

発　行　各務原市教育委員会

発行日　昭和五十四年三月

返却日案内

この本は、きめられた日までに、おかえしください。
最後の日付が、あなたの返却期限です。

54. 7.14	60. 9.-5
54. 9.11	
55. 1.27	
55. 8.19	
55. 9.-2	
56.11.-7	
56.12.20	
57. 8.-6	
57. 8.20	
58. 2.20	
58. 8.10	
58.10.-4	
58.10.18	
59. 5.-8	
59.12.-1	
60. 7.17	
60. 8.22	

各務原市図書館

388
KA

寄贈 495

この本はみんなの本です
一人でも多くの人が楽しく読める
ように次のことを守りましょう
①大切にいたしましょう
②本をよごしたり折目をつけぬよう
にしましょう。
③またがしはやめましょう
④かえす日には必ずかえしましょう

各務原市図書館

規文堂製

各務原市図書館
110215274

水ぬれや汚れ、書き込みなどで
本が傷ついています。
申し訳ありません。
各務原市立中央図書館